



小牧市民病院 外科医長

渡邊 卓哉

胆石症に対する外科治療



胆石とは？

胆石とは、胆汁（肝臓でつくれ、脂肪の吸収を助けてくれる消化液）の成分が固まって胆嚢（胆管から分岐して胆汁を一時的に貯蔵する肝臓の右下にある長さ10cmくらいの袋）内に石状、泥状になって溜まったものです。

肥満、中高年、女性、血液の中性脂肪が高い人に多いとされ、経口避妊薬の内服、急激なダイエットなども危険因子であることが報告されています。

症状は？

胆石を保持している人の大半は無症状で、症状を起こすことは少なく、人間ドックなどで初めて指摘されることも多いようです。

胆石発作の典型的な症状は、脂っこい食事を摂取した後のみぞおちの痛みや右脇腹の痛みなどで、七転八倒し救急車を呼ぶような強い痛みから軽い鈍痛までその程度はさまざまです。中には右側の背中の痛みや張り、肩凝りなどで見つかることも稀にあります。

また、胆嚢の出口が胆石で塞がれたりすると、胆嚢内の胆汁が細菌感染を起こし、いわゆる胆嚢炎を併発し高熱が出ることもあります。

治療は？

外科治療の対象となるのは症状のある胆石で、胆嚢ごと摘出する

必要があります。なぜなら胆嚢を残すと胆石が再発する恐れがあるからです。胆嚢の機能は胆汁を一時的に蓄えるだけで、術後も胆汁は肝臓でつくられて消化機能に影響が無いので、手術により胆嚢を失っても日常生活に支障はありません。しかし、油脂を採り過ぎると下痢をしやすい体質になる可能性はあります。

手術は通常、お腹の4カ所に穴を開けて、腹腔鏡というカメラでお腹の中を観察し、モニター映像を見ながら胆嚢を摘出するが標準治療となっています。利点は切開創が小さく目立たないことや、痛みが少なく社会復帰が早くできることです。

当院では1991年に全国に先駆けて導入して以来、年間約140例の手術を行っています。全身麻酔で行い、通常、術後3日ほどで退院となります。

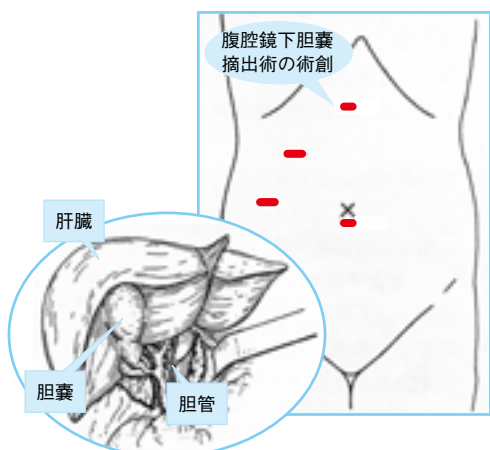
進化を続ける手術の方法

胆嚢炎を起こした後で、胆嚢周囲が固くなっていたり、以前の開腹手術による癒着（臓器や腸が腹壁にくっついてしまうこと）がある場合には、腹腔鏡手術が困難な場合もあります。そういった例では、安全性を重視して開腹手術が選択されることもあります。しかしながら近年の腹腔鏡手術の進歩は目覚ましく、当院では細部までよく観

察できるハイビジョン映像、出血の危険が少ない超音波凝固切開装置などをすべての手術に導入しており、より困難な例でも腹腔鏡手術が可能になってきています。

この2〜3年で新しい手術術式として単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術という、へそに1カ所だけ穴を開けて胆嚢を摘出する手術が登場してきました。傷跡が残らない利点がありますが、手術操作の困難性や見合った手術器械の開発の遅れなどから、まだ標準的治療とは言いがたいのが現状ですが、将来的には器械の発達とともに治療の可能性がありそうです。

気になる症状のある方は、当院へご相談ください。



問合先

市民病院 (☎ 76-4131)